

濃尾地震調査に赴いたお雇い外国人達の足跡—J・ミルン, W・K・バルトン, J・コンドル

Study on the footprints of foreign employees who proceeded to the Nobi earthquake investigation — J. Milne, W. K. Burton, J. Conder

平山 育男
HIRAYAMA Ikuo

This article deals with three foreign employees, J. Milne, W. K. Burton and J. Conder, who conducted on-site surveys in the stricken area of the *Nobi* earthquake. We investigated the relationship of three men and found the following points:

1. Official Gazette reported that Burton and Milne were dispatched to the stricken area on the same day of October 30, but actually Burton left on October 28 and Milne on October 29, thus they acted separately. However, they might have joined with each other at *Shukinro* Inn in *Nagoya* on October 30, 31 and November 1.
2. Burton and Conder might have met at *Shukinro* Inn on November 2. Also, they met in *Neo* valley on November 6 and left *Ogaki* on the same day of November 8.
3. Both Conder and Milne might have stayed at *Shukinro* Inn on November 2.
4. We can conclude from above that Milne, Burton and Conder might have stayed at the same place, *Shukinro* Inn in *Nagaya*, on November 2.

キーワード：濃尾地震、J・ミルン、W・K・バルトン、J・コンドル
Keywords：the *Nobi* earthquake, J. Milne, W.K. Burton, J. Conder

1 はじめに

明治24(1891)年10月28日に発生した濃尾地震の調査には日本人技術者を始め、当時来日していた複数のお雇い外国人も被災地における調査を実施した。本稿ではこの内、J・ミルン、W・K・バルトン、J・コンドルの3人について、それぞれがどのような行程で調査を行ったのかを示した上で、相互の関係を明らかにすることを目的とする。

2 J・ミルン、W・K・バルトン、J・コンドルによる濃尾地震調査行程

まずは3人の調査行程をそれぞれ示し、相互の関係を検討する材料としたい。

2-1 J・ミルンによる濃尾地震調査 ・ミルンについて¹

J・ミルンは、嘉永3(1850)年にイギリスのリバプールで生まれた。もともと専門は鉱山学で、その関係で日本へ明治9(1876)年に招かれた。明治13(1880)年に日本地震学会を主催し、以後、精力的に地震観測などを行った。明治19(1886)年における帝国大学の設置とともにミルンは工学部に招かれ、鉱山学、地質学を教授した。明治28(1895)年に帰国し、大正2(1913)年に逝去した。

なお、ミルンとバルトンは、濃尾地震被災地の調査結果を『THE GREAT EARTHQUAKE IN JAPAN, 1891.』²(以下、GEJとする)としてまとめている。

・地震の発生

ミルンは明治24(1891)年10月28日に発生した地震を東京の帝国大学構内の官舎で体感した。ミルンは官舎内に地震観測室を設置しており、ベッドから跳ね起きたミルンは機器の動きを観測した。続いて、構内における貯水槽、建物の被災状況などを記録したが、震動のため目眩を覚え、船酔いのような感じになったとする³。

・東京の出発

ミルンの濃尾地震被災地への出発は、明治24(1891)年10月31日付『官報』においては

○震災地方調査員派出 帝国大学ニ於テハ今回ノ震災調査ノタメ一昨二十九日鉄道庁ヘ協議ノ上工科大学教師ジョン、ミルン同ダブリュウ、ケー、バルトン及理科大学助手理学士大森房吉ヲ神奈川、静岡、山梨、愛知、福井、石川、富山、三重、滋賀、奈良、兵庫ノ十二県及京都、大阪二府地方ヘ昨三十日出張セシメタリ

とあり、10月29日の協議後、地震発生2日後となる10月30日と読めるが⁴、実際は地震の発生翌日となる10月29日夜の出発であった。それは明治24(1891)年10月31日付の『東京日日新聞』で

井上鉄道庁長と帝国大学御傭教師地震博士ミルン氏は一昨夜九時五十分新橋発の汽車にて破損線路及び震災の損線等実地視察の爲め何れも出発したり⁵

とあることから判明する。なお、翌11月1日付『東京日日新聞』には

理学士大森房吉は鉄道庁の依頼に応じミルン教授と同行にて廿九日の夜被害地へ出張せり⁶

とあるため、ミルンは井上鉄道庁長官、大森房吉と同じ列車で29日夜に新橋を出発し、浜松⁷へは翌30日朝6時頃、ほぼ予定通りの時間に到着⁸した。井上らの到着を待ち岡崎までの臨時列車がある⁹とされたが、8時になってその発車は9時2分発と発表された。およそ3時間をミルンは浜松駅前の大米屋で過ごし、列車の発車に合わせ駅へ駆け出した様子が東京から派遣された新聞社の特派員に目撃されている¹⁰。列車の岡崎着は11時15分で、岡崎以西は人力車による移動と考えられる。人力車は平時、時速10km程度であった¹¹が、1.5倍程度の時間¹²を想定し、名古屋への到着は10月30日夕方とするのが妥当である。

・名古屋到着

ミルンの名古屋到着は11月1日付の『新愛知』に帝国大学教授英人ミル氏は今回の大地震原因研究の爲一昨日来名さる

とあるように10月30日と確認ができ¹³、秋琴楼¹⁴に宿泊した¹⁵。

・被災地の調査

被災地におけるミルンの消息は以下に示すいくつかの記事などに見ることができる。まず、Hyogo News がまとめた『The Great Earthquake in Japan, October 28th 1891.』によると、Hyogo News が濃尾地震震災地へ派遣した特派員が10月31日に当たる記事で¹⁶、

Just at entrance to the Nagaragawa bridge we met Professor Milne.

[和訳] ちょうど長良川橋への取付部で、私たちはミルン教授に出会った。

と記しており、ミルンは10月31日午後には被災した長良川鉄橋に赴いたとすることができる。特派員とミルンとの遭遇は15時以後と判断できる¹⁷。一方、明治24(1891)年11月14日付『The Japan Weekly Mail.』(以下、JWM とする)に掲載され、11月7日付となるX.(=コンドル)からの投稿記事には¹⁸

In my last letter I told you that Prof. Milne had gone ahead; that was a mistake. He, as was probably necessary owing to his connection with the Railway Department, followed the line and went on to Otsu, Kyoto, and Osaka, as well as I can learn, after visiting Gifu and Ogaki.

[和訳] 前回の報告で、私は皆さんにミルン教授が先んじて現地に入ったとしたが、それは誤りであった。教授は恐らく鉄道庁との関係の必要性から、岐阜、大垣への訪問後、それに加え、私が調べたところでは鉄道沿いに大津、京都、大阪へ向かった。

とある。この記事が事実に基づくものであれば、ミルンはこの後、大津、京都、大阪へ向かったこととなる。なお、ミルンと新橋発が同じ列車であった井上長官は、明治24(1891)年11月2日付『日出新聞』¹⁹に

●鉄道庁長官 井上鉄道庁長官には一昨日午後九時二十分名古屋地方より来京祇園中村樓に投宿し昨日午前八時五十五分七条発の汽車にて垂井駅へ向け出発せりとある。つまり、井上長官は10月30日に名古屋へ到着し、翌31日には濃尾平野を横断し京都に宿泊し、11月1日には再び垂井へ戻っている。ミルンが井上に同道したとすれば、大津、京都へ向かい、ここから転じ垂井へ戻ったとすることができる。

・東京への帰還

井上長官の帰京は11月7日の『時事新報』²⁰において

○井上鉄道庁長官 は震災地に於ける鉄道線路其他被害の様実視のため出張の処一昨三日一先づ帰京したりと

とある。一方、ミルンの帰京時期とその理由は『東京新報』²¹において

○ミルン氏俄然帰京す

曩に地震学会より震災地へ派遣したる同氏は名古屋に於て病気に罹り去る四日夜辺に帰京し目下療養中なるが全快次第再び出発する筈なりと

とあり、ミルンは病気を患い11月4日夜に帰京したことが分かる。なお、ミルンの帰京を4日夜とすると、新橋

21時45分着もしくは23時50分着で、この列車の名古屋発は8時20分、11時14分で、いずれも同日の発着のため、鉄道庁の井上とは別行動で1日遅れての帰還となる。

2-2 W・K・バルトンによる濃尾地震調査

・バルトンについて²²

バルトンは安政3(1856)年、イギリスのエジンバラに生まれた。衛生技師として働き、明治20(1887)年に内務省衛生局の技師及び帝国大学の教師として招かれた。以後、国内及び台湾などにおける衛生調査、設計に尽力し、明治32(1899)年8月5日、日本で逝去した。

・名古屋到着

バルトンらの名古屋への到着は、GEJのPLATE I. 写真解説に

WE reached Nagoya the second night after the Earthquake and it is a night that will be remembered for many years.²³

[和訳] 私達は、地震後2回目の夜、名古屋に着き、それは長い年月忘れられない夜となろう。

とあるため、10月28日朝に発生した地震後2回目の夜、即ち10月29日夜の名古屋着と判断できる。但し、この行程のためには極めて早い段階で地震の被害地を特定し、地震発生当日28日となる新橋21時50分発の汽車に乗車する必要がある。

・被災地の調査

翌朝からバルトンは調査に着手し、GEJ、PLATE I. の写真解説には

Next morning we visited one of the suburbs of Nagoya called Biwajima,²⁴

[和訳] 翌朝、私達は枇杷島と呼ばれる名古屋郊外を訪れた。

とあり、11月5日付『国会』紙には

●震災地巡覧之記 第四《中略》名古屋付近の被害状況を一覽せんとて今三十一日午前八時腕車にて枇杷島町の方に向ひしハ大学御雇教師バルトン氏、巨智部商務技師、中村東京気象台長其他愛知県庁員、大学生徒等なり²⁵

と記録されることから、連日、枇杷島方面への調査に赴いたことが判明する。以後の日程は11月4日付『岐阜日日新聞』に

●外人の被害地調査 英国人「だぶりゆ、けーばるとん」氏は震災地方実地取調として昨日来岐津国屋に投宿したり²⁶

とあるため、11月3日には岐阜へ赴き、津国屋に宿泊した²⁷ため、この間は、名古屋市内や熱田での調査と推察される。岐阜への移動は黒田、笠松を経由し、GEJのPLATE IX. 写真解説における

Now, November 3rd 1891, Gifu,

[和訳] 現在、1891年11月3日、岐阜²⁸

とある点に合致する。そしてバルトンは翌4日以後、11月4日付『東京新報』の記事に

バルトン氏根尾谷へ赴く

バルトン氏及び中村中央気象台技師は昨日岐阜に來り今朝根尾谷筋へ向け実地取調のため赴きたり²⁹

とあるように、中央气象台の中村精男らと根尾谷へ向かった。中村にはミルンと被災地へ赴いた大森も同道した³⁰。バルトンは11月4～6日の行程で根尾谷を訪れ、断層の調査を実施した。そして、11月7、8日は岐阜から大垣に向かったものと考えられる³¹。

・東京への帰還

バルトンの帰路はJWM紙の明治24(1891)年11月14日号に

PASSENGERS.

ARRIVWD.

...

Per Japanese steamer Yamashiro Maru, from Kobe: -
...Professor Burton³²

[和訳] 旅客

到着《中略》

日本 汽船 山城丸 神戸発《中略》バルトン教授とあることから、神戸発の山城丸で横浜へ向かったことが判明する。山城丸は神戸を11月9日12時に出港し、10日18時、横浜に到着した³³。この船に乗るためには大垣から神戸へ8日に移動したとするのが妥当である。当時、大垣発の神戸行は1時54分、7時10分、14時22分、17時18分発の4本で、各列車の神戸着は8時5分、13時40分、21時22分、翌日0時18分であった³⁴ため、8日夜に大垣から神戸へ移動したとすれば、17時18分発の列車を用いたと判断できる。

2-3 J・コンドルによる濃尾地震調査³⁵

・コンドルについて

J・コンドルは嘉永5(1852)年、ロンドンで生まれた。建築を学び、明治10(1877)年に工部大学校教師、工部省顧問として招請された。明治21(1888)年には教師を辞し、建築事務所を開設し、大正9(1920)年6月21日に東京で亡くなった³⁶。なお、コンドルは濃尾地震被災地の調査の結果を、JWM紙に署名人X.の名前で投稿し³⁷、更に一連の調査結果を明治25(1893)年の日本地震学会会誌『Seismological journal of Japan』に“AN ARCHITECT'S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891.”³⁸(以下“NOTES”と記す)として発表している。

・名古屋到着

コンドルは明治24(1891)年11月1日新橋21時50分発の列車に乗り、浜松で列車を乗り換えて岡崎からは人力車で名古屋に向かい、名古屋到着は2日14時頃となった³⁹。

・被災地の調査

JWM紙、明治24(1891)年11月7日号掲載の署名人X.(=J.コンドル)による11月2日の日程によると、コンドルはこの日

I reached here at 2 p.m. to-day and at once proceeded to visit two of the principal brick buildings which suffered severely in Nagoya.⁴⁰

[和訳] 私は本日午後2時に当地へ到着し、直ちに名古屋で甚大な被害を受けた煉瓦造の主要な2棟を見に出かけた。

とするが、この2棟の名称はJWM紙に記されない。一方、“NOTES”によれば

Arriving at Nagoya, the brick buildings received first attention, their damage having been attended with the most serious result. The Post and Telegraph Office, a high brick structure two stories, showed a large length of the wall of its upper story fallen from the cornice to the sills of the upper windows...The next brick structures examined were the Engine and Dynamo Hall and the furnace chimney of the Nagoya Electorical Lighting Company, erected by the Nagoya Kenchiku Kaisha.⁴¹

[和訳] 名古屋に到着して、最初に注目したのは最も激しい被害を受けた煉瓦建築である。それは2階建の郵便電信局で、上階の壁がコーニスの上から窓敷居まで、かなりの長さに渡りが崩落していた。《中略》次に調査を実施した煉瓦造建築は名古屋建築会社によって造られた名古屋電灯会社の発電機室と煙突であった。

とあるように、コンドルは名古屋到着直後、先ず訪れた煉瓦造建築とは名古屋郵便電信局と名古屋電灯会社である。以後の記載は第三師団、隣接する名古屋城、名古屋駅、績績工場、勸工場、学校、県庁、そして秋琴楼、本願寺などへ移る⁴²。なお、名古屋でコンドルが宿泊に用いたのはJWM、“NOTES”には記されないが、コンドルが“NOTES”に建物内部の写生(スケッチ)を残す秋琴楼⁴³とするのが妥当である。

11月3日、コンドルは県庁に赴き、

○ゴンドル氏の来県 内務省建築局御雇ゴンドル氏は被害地取調べの為め再昨日来名し愛知県庁へ出頭し柳本書記官に面晤し夫より用ヶ瀬同県技師の案内にて同県下実況視察として出張せり⁴⁴

とあるように、書記官に面会后、用ヶ瀬技師の案内で被災建物の調査を実施した。調査建物は“NOTES”によれば順に第三師団及び名古屋城などの建物となる。そして、翌4日までの間に名古屋周辺の調査を行った。続いて11月5日に岐阜で記載されたJWM紙における投稿には

Having finished an examination of the Nagoya buildings, I started for here this morning, passing on the way through Biwajima, the suburb of Nagoya in which the most wholesale destruction has taken place.⁴⁵

[和訳] 名古屋で建物の被災状況の視察を終え、当地に向けて今朝発った。途中、最大の被害の発生した名古屋郊外に位置する枇杷島を経由した。

とあることから、この日、コンドルは名古屋を立ち、枇杷島を経由して岐阜に向かったことが判明する。なお、岐阜におけるコンドルの宿泊はJWM紙において“Tamaya”(タマヤ)とする⁴⁶が、これは玉井屋であろう。岐阜に着いたコンドルは、ここで河合浩哉と田中豊輔に遭遇する。河合によるコンドル没後の追悼文によれば、

内地旅行十余日

明治廿四年十月美濃大地震の時、私は震災地全部へ出張を命ぜられ先発して居つた、先生〔コンドル、著者注〕には岐阜で出会つた。其れより私と田中豊輔君は根尾谷奥の震源地と称する藤谷高尾と云ふ所まで参るのであつた。君等が行くのなればとて先生も同行され

る事に成り、三名山口と云ふ所まで俾、其れより先きは徒歩で出発した、《中略》山口より藤谷まで拾七八里と記憶して居る⁴⁷

とあり、コンドルも濃尾地震震源地と目される根尾谷へ赴いたことが記録される。河合によると山口まで人力車で向かい、以後は徒歩とする⁴⁸が、“NOTES”では

Beyond this the village of Kimbara was reached, and this marked the limit that it was possible to proceed in *jinrikisha*, the rest of the journey having to be performed on foot.⁴⁹

[和訳] これを越えて金原の村に到着し、そしてここが人力車で進める限界で、残りは徒歩で行かねばならなかった。

とある⁵⁰。ここではコンドルの記載を採り、11月6日に金原まで人力車で進んだとしておく。なお、コンドル等の宿泊地は水鳥の農家における仮設小屋で⁵¹、この日は水鳥までの行程となる。“NOTES”によれば翌7日、コンドルらの一行は宿泊した水鳥を立って藤谷へ向かい、帰りは注目に値する自然現象、即ち“根尾谷断層”を調査した後、帰路は岐阜まで同じ道筋を進んだとする⁵²。なお、河合によれば帰途、水鳥で前日宿泊した農家に立ち寄ったとする⁵³。

コンドルは11月7日山口泊で、翌8日に一度岐阜へ戻ってから大垣へ向かった。“NOTES”によれば途中、長良川における被害も確認し、大垣では大垣城、警察署、郵便局、刑務所等の調査を実施し、神戸から義捐金を携えたシムと遭遇した⁵⁴。大垣以西は復旧していた鉄道による移動で、11月8日の晩遅く大阪に着いた⁵⁵。

『大阪朝日新聞』ではコンドルの大阪宿所を中之島の花屋とする⁵⁶。大阪調査はJWMによれば翌9日午後からで、この日は移動距離が長く少しの建物しか見ることができず、過労から寝込んだという。翌10日は雨天であったが⁵⁷三軒家紡績工場の調査を実施⁵⁸した。11、12日の調査は“NOTES”では金巾製織、浪華紡績、大阪盛業、大阪府立商品陳列所、泉州紡績、パノラマ館、造幣局、大阪砲兵工廠、大阪郵便通信局の建物を挙げ⁵⁹、JWMではこの他に川口居留地、三菱の銀行を11月12日付の紙面に挙げる⁶⁰。以後、大阪における調査は11月14日にコンドルは泉州紡績を再度訪れたとされる⁶¹。

・東京への帰途

コンドルは11月15日に神戸に向かい⁶²、翌11月16日正午、神戸出港の長門丸⁶³に乗船し、横浜には11月17日に到着している⁶⁴。

3 ミルン、バルトン、コンドルの調査における遭遇

ミルン、バルトン、コンドルによる、各々の調査行程をまとめると表1の通りであるが、この成果を参考に、各人が調査地においてどのように関係しあったのかを次ぎに見て行きたい。

3-1 ミルンとバルトン

ミルンとバルトンの濃尾地震被災地への派遣は、『官報』に基づけばいずれも10月30日と読むことができたが、各々検討を加えると、ミルンは10月29日の出発、バルトンは28日の出発であったため、両者の出発は別行動とするこ

とができる。但し、バルトンは11月3日まで名古屋の秋琴楼を宿舎として周辺の調査を行う一方、秋琴楼には10月30日夜、ミルンが宿泊したことから、10月30日における両者の遭遇が考えられる。

以後、ミルンは10月31日に京都泊であるが、転じて11月1、2日も秋琴楼の宿泊とすれば、11月2日におけるバルトンとの情報交換の可能性が指摘できる。なお、GEJでは特に長良川鉄橋の被害写真を多数掲載するが、これはミルンからの要請と見ることもできよう。

3-2 バルトンとコンドル

コンドルの名古屋入は11月2日と下るが、この日に秋琴楼へ宿泊したコンドルと、バルトンの秋琴楼における遭遇が指摘できる。

翌11月3日にバルトンは岐阜県に向かい、11月4～6日の行程で根尾谷へ向かったのに対し、コンドルは11月3、4日に名古屋で調査を行い、5日に岐阜へ赴いた。そして、11月6、7日の行程で根尾谷へ向かうが、11月6日、コンドルはバルトンとの遭遇を

Prof. Burton went partly up the valley that I have just returned from to a village a little above Midori, and was obliged to return as his time was short.⁶⁵

[和訳] その谷は私がちょうど水鳥から少し登った村で、バルトンは時間がなかったため戻らねばならなかった。

と記録しているため、11月6日の根尾谷における両人の関係を確認できる。

更に、バルトン、コンドルとも11月8日に大垣から関西へ向かっており、両者が関係した可能性を指摘できる。

3-3 コンドルとミルン

コンドルの名古屋着が明治24(1891)年11月2日であるが、この時、既にミルンは京都から名古屋に戻り同じ秋琴

表1 濃尾地震後の調査におけるJ・ミルン、W・K・バルトン、J・コンドルの行程

日付	J・ミルン	W・K・バルトン	J・コンドル
10/28	大学官舎にて被災	被災地へ夜新橋発	
10/29	夜新橋発	名古屋宿泊	
10/30	夕方名古屋着	枇杷島橋など調査	
10/31	夕刻に長良川鉄橋京都宿泊か	枇杷島調査	
11/01	垂井へ戻ったか	名古屋調査	夜新橋発
11/02	名古屋?	名古屋調査	名古屋調査
11/03	名古屋?	岐阜へ向かう	名古屋調査
11/04	東京へ戻る	根尾谷	名古屋調査
11/05		根尾谷	岐阜へ向かう
11/06		根尾谷	根尾谷
11/07		岐阜、大垣	根尾谷
11/08		大垣発	大垣発
11/09		神戸発	大阪調査
11/10		横浜着	大阪調査
11/11			大阪調査
11/12			大阪調査
11/13			大阪調査
11/14			大阪調査
11/15			神戸
11/16			神戸発
11/17			横浜着

楼に宿泊したと考えることができる。

なお、既に指摘した11月7日付となるX.(=コンドル)からの投稿記事に、ミルンが鉄道庁との関係から岐阜、大垣へ訪問し、それに加え、自らの調査によれば鉄道沿いに天津、京都、大阪へ向かったとする点は、この時の聞き取り成果を反映する可能性もある。

3-4 ミルン、バルトン、コンドルの遭遇

以上を勘案すると、11月2日夜、名古屋の秋琴楼にてミルン、バルトン、コンドルの3者が同宿した可能性を指摘できる。

4 さいごに

本稿では濃尾地震後、被災地の調査に赴いたJ・ミルン、W・K・バルトン、J・コンドルという、3人のお雇い外国人の足跡をたどり、3者の関係を考察したが、明らかとなるのは以下の諸点である。

- 1) ミルンとバルトンは『官報』によれば、10月30日同日の派遣となるが、ミルンは29日、バルトンは28日の出発と別行動なる。但し、両人は10月30日夜及び11月1、2日名古屋の宿舎である秋琴楼で遭遇の可能性はある。
- 2) バルトンとコンドルについては、名古屋入が11月2日のコンドルと、先発したバルトンの秋琴楼における遭遇が指摘できる。また、両人は11月6日に根尾谷にて遭遇し、11月8日の大垣発も同日となる。
- 3) コンドルとミルンについては、11月2日、名古屋へ到着したばかりのコンドルと、京都から戻ったミルンが同じ秋琴楼に宿泊した可能性を指摘できる。
- 4) 以上を勘案すると11月2日、ミルン、バルトン、コンドルの3者が名古屋の秋琴楼に宿泊した可能性がある。

参考文献

- 1) John Milne. and W・K・Burton. Plates by K.Ogawa.: The Great Earthquake in Japan, 1891.
- 2) J.Conder: AN ARCHITECT'S NOTES ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER, 1891., Seismological journal of Japan18, pp.1 ~ 91, 1893.12
- 3) 平山育男: J.コンドルによる濃尾地震の調査 横浜の欧字新聞社へコンドルによる投稿、日本建築学会計画系論文集717, pp.2645 ~ 2652, 2015.11
- 4) 河合浩蔵: コンドル先生を悼む、建築雑誌406, pp.417 ~ 420, 1920.9

注釈

- 1) レスリー・ハーバート=ガスタ、パリック・ノット、宇佐美龍夫監訳: 明治日本を支えた英国人 地震学者ミルン伝、日本放送協会、昭和57(1982).2 参考文献1)
- 2) 参考文献1)
- 3) John Milne: A NOTE ON THE GREAT EARTHQUAKE OF OCTOBER 28TH, 1891., Transactions of the Seismological Society of Japan 17, 2 ~ 3 頁、明治26(1893)

- 4) 内閣官報局: 官報、明治24(1891).10/31、327 頁
- 5) 日報社: 東京日日新聞、明治24(1891).10/31、4 頁
- 6) 日報社: 東京日日新聞、明治24(1891).11/1、5 頁
- 7) 日就社: 読売新聞、明治24(1891).10/31、2 頁
- 8) 内閣官報局: 官報2343、明治24(1891).4/25、340 頁、全国鉄道発車時刻表
- 9) 東京朝日新聞社: 東京朝日新聞、明治24(1891).11/1、5 頁
- 10) 毎日新聞社: 毎日新聞、明治24(1891).11/3、3 頁
- 11) 東京都: 東京市史稿市街編51、165 頁、昭和36(1961).11。ここに掲載される引札に“一時五里”、則ち2時間でおおよそ20kmとあり、時速10km程度と考えられる。
- 12) 明治24(1891)年11月2日、同じ道程を、コンドルは6時間程で移動している。平山: J.コンドルからの手紙コンドルから横浜欧字新聞への投稿から明らかとなる濃尾地震調査の日程 J.コンドルによる濃尾地震調査の研究(2)、日本建築学会東海支部研究報告書53、617 ~ 620 頁、平成27(2015).2
- 13) 新愛知社: 新愛知、明治24(1891).11/1、1 頁
- 14) 新愛知社: 新愛知、明治24(1891).11/1、1 頁、扶桑新聞社: 扶桑新聞、明治24(1891).11/1、1 頁。なお、両紙の記事とも“雇ゼシールン氏”が名古屋に赴き、秋琴楼に向かったとするが、鉄道庁の井上長官に同行していることから、これはJ. Milneと考えられる。誤植の原因はミルンの読みである“ゼー・ミルン”が“ゼー・シールン”となったものと考えられる。
- 15) 扶桑新聞社: 扶桑新聞、明治24(1891).11/3、3 頁。この記事によれば、ミルンに同行した大森も秋琴楼に宿泊したことが判明する。
- 16) Hyogo News: The Great Earthquake in Japan, October 28th 1891., 18 頁、明治24(1891).11。なお、別稿においてはこれを10月30日としたが、記者らは10月30日に大津の見習亭泊としているため、大津から岐阜への移動は翌10月31日と判断することができる。
- 17) Hyogo News: The Great Earthquake in Japan, October 28th 1891., 17 頁、前掲。前述の引用直前に、“At one point we wished for a glass of water for we had left Tarui at eleven, and it was now three.” [和訳] “私達は11時に垂井を出発し、現在は午後3時であるため、この時点で、私達は喉を潤したくなった。”とあるため、特派員とミルンの遭遇は15時過ぎと考えることができる。
- 18) Japan Mail Office: The Japan Weekly Mail、明治24(1891).11/14、591 頁
- 19) 日出新聞社: 日出新聞、明治24(1891).11/2、号外2 頁
- 20) 時事新報社: 時事新報、明治24(1891).11/5、3 頁
- 21) 東京新報社: 東京新報、明治24(1891).11/7、附録1 頁
- 22) 平山、金出ミチル: 都市への給水 - W・K・バルトンの研究、中央公論美術出版、平成25(2013).11、に詳しい。参考文献1) PLATE I. 写真解説
- 23) 参考文献1) PLATE I. 写真解説
- 24) 参考文献1) PLATE I. 写真解説
- 25) 国会新聞社: 国会、明治24(1891).11/5、3 頁
- 26) 岐阜日日新聞社: 岐阜日日新聞、明治24(1891).11/4、2 頁

- 27 岐阜日日新聞社：岐阜日日新聞、明治24(1891).11/5、
2頁。欄外に旅人宿津国屋の見舞お礼広告がある。
- 28 参考文献1)、PLATE IX. 写真解説
- 29 東京新報社：東京新報、明治24(1891).11/8、1頁
- 30 岐阜日日新聞社：岐阜日日新聞、明治24(1891).11/10、
2頁
- 31 平山：明治24(1891)年濃尾地震におけるバルトンによる
根尾谷の踏査日程と行程について W・K・バルトンの
研究 (42)、日本建築学会北陸支部研究報告集57、
475～478頁、平成26(2014).7
- 32 Japan Mail Office: The Japan weekly Mail、明治24
(1891).11/14、598頁
- 33 Japan Mail Office: The Japan weekly Mail、明治24
(1891).11/14、598頁
- 34 内閣官報局：官報2343、明治24(1891).4/25、340頁
- 35 平山：J. コンドルによる濃尾地震の調査地から横浜の
欧字新聞社への投稿について、日本建築学会計画系論
文集717、2645～2652頁、平成27(2015).11、平山：
J. コンドルによる濃尾地震被災地の調査地と日程につ
いて、日本建築学会計画系論文集719、187～194頁、
平成28(2016).1、に詳しい。
- 36 建築学会：時報、建築雑誌403、329頁、大正9(1920).7
- 37 参考文献3)
- 38 参考文献2)
- 39 参考文献3)
- 40 Japan Mail Office: The Japan Weekly Mail、明治24
(1891).11/7、556頁
- 41 参考文献2) 3～6頁
- 42 参考文献2) 3～34頁
- 43 参考文献2) 33、34頁
- 44 扶桑新聞社：扶桑新聞、明治24(1891).11/5、2頁
- 45 Japan Mail Office: The Japan Weekly Mail、明治24
(1891).11/14、587頁
- 46 Japan Mail Office: The Japan Weekly Mail、明治24
(1891).11/14、591頁
- 47 参考文献4) 418頁
- 48 参考文献4) 418頁
- 49 参考文献2) 58頁
- 50 参考文献2) 58頁
- 51 参考文献4) 418頁
- 52 参考文献2) 59頁
- 53 参考文献4) 418頁
- 54 Japan Mail Office: The Japan Weekly Mail、明治24
(1891).11/14、591頁
- 55 Japan Mail Office: The Japan Weekly Mail、明治24
(1891).11/14、591頁
- 56 大阪朝日新聞社：大阪朝日新聞、明治24(1891).11/10、
1頁
- 57 内閣官報局：官報2511、明治24(1891).11/11、108頁、
によれば11月10日における大阪の天気は午前6時、
午後2時とも雨で14時の雨量は11mmと記録される。
また、内閣官報局：官報2512、明治24(1891).11/12、
123頁、によれば、同日夜9時の天気は雨で雨量は6mm
と記録される。
- 58 Japan Mail Office: The Japan Weekly Mail、明治24
(1891).11/14、591頁
- 59 参考文献2) 71～89頁
- 60 Japan Mail Office: The Japan Weekly Mail、明治24
(1891).11/21、616頁
- 61 大阪毎日新聞社：大阪毎日新聞、明治24(1891).11/14、
1頁
- 62 大阪毎日新聞社：大阪毎日新聞、明治24(1891).11/14、
1頁
- 63 大阪朝日新聞社：大阪朝日新聞、明治24(1891).11/13、
4頁、日本郵船会社汽船神戸出帆広告
- 64 Japan Mail Office: The Japan Weekly Mail、明治24
(1891).11/21、630頁
- 65 Japan Mail Office: The Japan weekly Mail、明治24
(1891).11/14、591頁